インターンシップにおけるコミュニケーションの重要性：

国際連合大学・留学生支援プログラム（UNU-FAP）を題材として

国際連合大学
プログラムオフィサー　大西好宣

1、背景

日本における国際協力分野のインターンシップ制度について、筆者がその拡充を訴えてから既に数年が経つ[i]。当時は、企業での就業体験を中心として、やっとこの外来の制度が徐々に広まり始めた頃で、企業も大学もライバルの動向を睨みつつ、制度の導入を手探りで進めているというような段階であったと記憶する。

そのような状況であるから、国際協力の分野でそれを応用しようと考えていた者は大学にもいわゆるNGO・NPOにもそう多くなかった。当時、筆者が調べた例では、外務省の国際協力担当部局やその外郭団体である国際開発高等教育機構（FASID）などが導入していたくらいで[ii]、国際協力の現場レベルではこの制度の実態を知り、その効用を説く人は皆無と言ってよかった。

それが今や様変わりといった観がある。1990年代以前は、インターンと言えばわが国では大学の医局など、ごく限られた場所でのみ使用された特殊な言葉であったのに、今日では高等教育でも企業でも全く日常の語彙となり、広く人口に膾炙することとなった。文部科学省の諮問機関である中央教育審議会ですら、「我が国の高等教育の将来像」[iii]と題する報告の中で触れなければならなかったほど、この制度の存在感は大きくなっている。

国際協力の分野でも、インターンシップ制度を実施する機関は確実に増えた。現実に数多くのNGOがインターンを受け入れ、大学側でも中央大学[iv]や桜美林大学[v]のように学生をその希望に応じて国内外のNGOに派遣するといったプログラムを実施するところが増えてきている。

2、本稿の意義と目的

しかしながら、国際協力の分野で急速に拡大する、このようなインターンシップ制度について、では一体それが学生（インターン）にどのような影響を与えているのか、或いはどのような問題を孕んでいるのかといった点は、残念ながらなかなか見えてこない。

調査研究を含めた情報が少ないからであろう。

そこで本稿では、先行研究の分析を土台として、筆者の勤務する国際連合大学・留学生支援プログラム（UNU-FAP）の実施するインターンシッププログラムを題材に、そのような情報不足を少しでも解消したい。具体的には、以下の3つの点を明らかにするため、対象者に聞き取り調査を行い、その結果を共有したい。

(1) 学生たちが国際協力の分野でインターンをしようと思った理由
(2) 当初の期待と、実際の経験との溝
(3) 雇用者側にとっての教訓

3、先行研究

(1) インターンシップの定義

木村（2000）[vi]によれば、海外では「産業界に送り出す直前の教育」をinternship、「在学中の就業体験教育」をcooperative educationと呼ぶという。その上で、日本のインターンシップを主に後者として位置づけているものの、実際には総称としてインターンシップを使用しているという。山崎・大谷（2005）[vii]もこの定義を追認している。

しかしながら、筆者はこの見解に疑義なしとしない。筆者自身、インターンシップ制度を初めて知ったのは米国の大学院留学時であり、その間実際に体験もしたが、当時（1992～1994）から米国でもインターンシップという言葉の方が一般的であった。現に、筆者の属する米国の大学もインターンシップ以外の呼称は用いていなかった。

また、現実問題として、木村の言う「送り出す直前」と「在学中」とをどのように峻別するのか。両者には重なり合う期間も当然あるはずで、それを分けることの意義が筆者にはどうしても見出せない。

一方、冒頭の1で紹介した中央教育審議会はその答申「我が国の高等教育の将来像」（2005）の中で、インターンシップを「学生が在学中に、企業等において自らの将来希望する職業に関連した職業体験を行うこと」と定義している。この方が余程説得力のある、そして応用範囲の広い定義であると思われる。

筆者は昨今の状況から、インターン派遣先として確立してきたNGOを加えるなど、この定義をさらに広く表現し直し「学生が在学中に、企業や*NGO*等において、自らの将来希望する職業や*現在学んでいる*事柄等に関連し、職業体験を行うこと」と再定義したい。

(2) キャリアの入り口としてのインターンシップ

本稿の冒頭で述べたように、わが国におけるインターンシップ制度の浸透は1990年代に始まった（次節で詳述）。同年代初頭にはいわゆるバブルの崩壊があり、それまで日本経済の大きな特徴とされた、企業の終身雇用制が崩れ始めた。労働者の失職・転職はより一般的となり、その分、職業選択、とりわけ新卒学生のそれは1990年代以前に比べより深刻味を増すようになる。インターンシップ制度が日本で浸透し始めたのは、まさにこのような時代であった。

そうした時代背景から、楠奥（2006）[viii]はキャリアの入り口問題解決策としてインターンシップを捉えた。キャリアの入り口問題とは、「自分の将来に展望がもてずに職業を決定しない、あるいはできない状態の者が増え」たことを指す。そこで楠奥は、自信の程度を表す概念として「自己効力感」というキーワードを用い、インターンシップにより学生が職業上の自信を深める効果を説く。また、河地（2005）[ix]も自ら実施したインタビュー調査をもとに、同様の報告をしている。

本節の最後に、臨床心理学者バンデュラ（Bandura,A.,1977）[x]によって提唱された「期待」の概念を紹介しておきたい。これは上記で楠奥が唱えた「自己効力感」の基礎となった概念であり、社会的学習理論もしくは社会的認知理論の中核をなすものである。バンデュラは、「期待」という概念を結果期待と効力期待の2つに分けて考える。結果期待とは、ある課題を遂行することによって、このような結果が得られるであろうという期待であり、言わば自らの行動の結果に対する予見である。

他方、効力期待とは、その行動そのものができるという期待である。もっと単純に言えば、課題遂行にあたっての「自信」だと表現することも可能であろう。バンデュラは、実際に行動をおこすためにはこの自信（＝効力期待）こそが、結果期待や過去の経験より重要だと説く。彼のこの仮説は若者の心理学的成長を分析・描写する上で用いられることが多いため、後述するインターンへのインタビュー調査を分析する際に有用となろう。

(3) わが国におけるインターンシップの発展と現状

わが国における、インターンシップの起源となる年は、おそらく1997年頃であろうと思われる。この年、「経済構造の変革と創造のための行動計画」が正式に閣議決定され、その中でインターンシップの推進が提唱された。

これを受けた当時の労働省は、即座に「インターンシップ等学生の就業体験のあり方に関する研究会」（座長：諏訪康雄法政大学教授）を設立する。その成果として、文部省・通商産業省・労働省が共同で「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」

を取りまとめる。

また同じ年、経済界もインターンシップに注目し始める。当時、経済同友会が調査した数値として、文系学生に対して4%、理系学生には22%の企業が何らかのインターンシップの機会を提供している、というものがある[xi]。

筆者が「国際協力分野でもインターンシップの拡充を」と訴えた1999年には、日本インターンシップ学会が設立されており、これをもって同制度に関する産官学それぞれの取り組みが明確となった。

今世紀に入り、この制度はより一層の広がりを見せる。次に紹介する2003年以降の数値と1997年当時のそれとを比較すれば、わずか10年足らずの間に急激な進展があったことがわかるだろう。1990年代後半をわが国におけるインターンシップの黎明期と位置づければ、今世紀初頭はその普及期と呼ぶこともできよう。

文部科学省による「平成17年度インターンシップ実施状況調査結果」[xii]によれば、授業科目として位置づけてインターンシップを実施する大学は全体の62.5%にまで高まっている（表1)。また、このような制度を利用してインターンシップを体験した大学生は全国で年間42,454人であった（表2)。

表１：授業科目として位置づけてインターンシップを実施する学校

学校種別	2003年度		2004年度		2005年度		2006年度（予定）	
	校数	実施率	校数	実施率	校数	実施率	校数	実施率
大学	384	55.0	418	59.0	447	62.5	499	69.8
短期大学	139	29.9	155	35.3	157	37.8	169	40.7
高等専門学校	57	90.5	57	90.5	60	95.2	61	96.8

(出典：文部科学省「平成17年度インターンシップ実施状況調査結果」p1.)

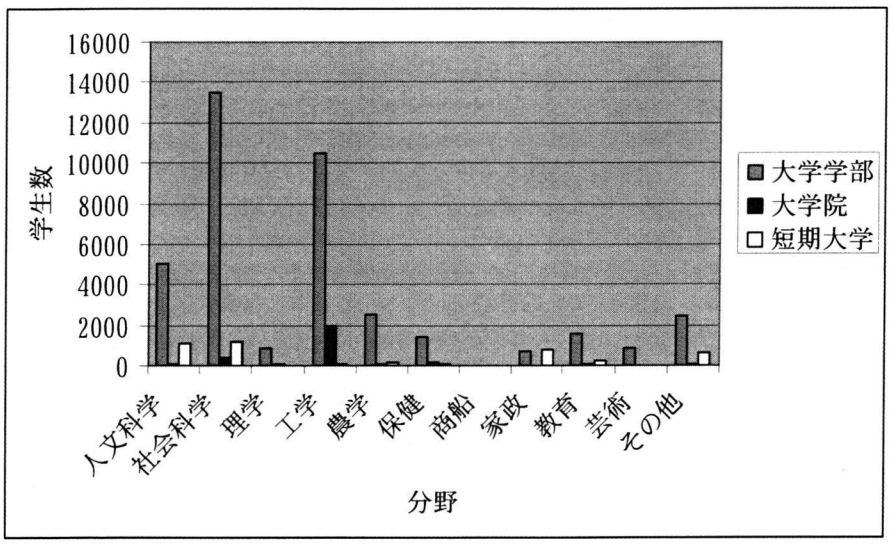
表２：インターンシップ体験学生数

学校種別	2003年度	2004年度	2005年度
大学	34,125	39,010	42,454
短期大学	3,049	4,598	4,307
高等専門学校	5,966	6,571	7,463

(出典：文部科学省「平成17年度インターンシップ実施状況調査結果」p3.)

また、学生がどのような分野でインターンシップを体験したかについても、上記調査結果は示している（図1）。但し、本稿の目的である国際協力分野は社会科学・農学・保健・教育など複数の分野にまたがっていると思われ、この結果のみからはどの程度の規模に成長したのか残念ながら定かでない。

図１：分野別インターンシップ体験学生数



（出典：文部科学省「平成17年度インターンシップ実施状況調査結果」p4の表より著者作成）

4、UNU-FAPインターンシップ制度の概要と調査方法論

前項3で紹介したように、インターンシップに関する全体的な状況こそ明らかになっているものの、被雇用者である学生、また雇用者である企業やNGOなど、インターンシップの各個別経験主体の視点を基にした調査・研究は非常に少ない。わずかな例外は、幾つかの大学が発行する学生のインターン体験談集である。しかし、それらの多くは例え同じ大学の学生体験談集であっても、フレームワークが一定しないため発言内容はばらばらで、調査・研究と呼べるものではない。また当然のことながら、国際協力分野での類似調査についても、上記と同じ理由でほぼ皆無である。その意味で、UNU-FAPのインターンシッププログラムを題材とした本論考も、微力ではあるが何らかの参考になるものと信ずる。

以下がUNU-FAPとそのインターンシッププログラムの概要である。

(1) UNU-FAPについて

UNU-FAPは日本政府（外務省）および、有償資金協力という観点から国際協力銀行が出資する資金により、日本国内の大学（協力大学と呼ぶ）を通じて、開発途上国からの私費留学生が日本で勉強するために必要な資金を貸与する制度である。

開発途上国の人材育成に寄与することがその目的で、貸与上限額は4年制課程で40万円、3年制課程で30万円、2年制課程で15万円。いずれも1か月から6か月の返還据え置き期間後に毎月1万円ずつを卒業までに返還する仕組みである。

2007年11月末現在、上記の趣旨に賛同して協力大学となった大学・短大の数は32校、受給生は593名となっており、返還率も概ね良好である。

(2) UNU-FAPインターンシップ制度の概要

UNU-FAPでは、上記協力大学32校の留学生（UNU-FAPの受給生で、予定通り返還している者に限る）および日本人学生を対象に、毎年春（2～4月）と夏（7～9月）の2回、インターンシップを実施している。募集は各協力大学を通じて、その3か月前から行う。

選考過程では、各協力大学が本人の学業成績や人物を基準にUNU-FAPへ推薦することとし、UNU-FAPはさらに彼らの日本語および英語の運用能力を見ることとしている。

勤務は原則として1か月半以上とし、最長3か月まで認めている。本人の希望や諸事情を考慮し、週2～3日の変則的な勤務を認めることもあるものの、原則は土・日を休日とする週4～5日、朝9時半から夕方5時半までという一般的な勤務形態である。

この制度の場合、インターンには毎回決まった仕事を与えている。それはUNU-FAPが協力大学および受給生に向けて発行する、ニュースレターの制作である。インターンはそのための企画、取材、記事執筆、編集・校正までを行う。例えば、このニュースレターには「留学生と就職」という人気コーナーがある。インターンはまずどこか関心のある企業[xiii]を選び、人事部等の採用担当者に留学生の採用に関するインタビューを依頼する。インタビューの質問内容はインターン自身が決め、自らインタビューを行った後、それを記事としてまとめる。

(3) 調査方法論

2007年10月末現在、当該インターンシッププログラムに参加した学生は総勢12名である。その内国内に居住し、連絡のついた者10名に面会、以下の6つの質問をした。

①どのようにFAPのインターンシッププログラムを知り、応募しましたか？　→大学

はどのように宣伝、協力してくれましたか？

②インターン中のご自身の様子を教えてください。

a) 楽しかったことは何ですか？

b) 大変だったことは何ですか？

c) 驚いたことは何ですか？

d) インターンは無給で、必ずしも自分のやりたいことができるわけではないかもしれませんが、どのようにモチベーションを保っていましたか？

e) その他、インターン中に考えていたことなど。

③FAPでインターンをしようと思った理由、また、このインターンシッププログラムに期待していたことは何ですか？

④FAPでのインターンシップは、当初の自分の期待に合っていましたか？望むものは提供されましたか？ →どんな点がそうだったのですか？ どうしてですか？

⑤FAPでのインターンシップはその後役に立っていますか？
→どんな場面で、どんなことが、どんな風に役に立っていますか？

⑥その他、感想、意見、提案など何でもご自由にお話し下さい。

インタビューに回答した元インターン（以下インフォーマントと呼ぶ）10名のプロフィールは以下のようである。No.1からNo.5までが留学生、そしてNo.6からNo.10が日本人となるようにまとめた。それぞれ、インターン時期の早い方から順番に並べてある。

表３：インフォーマント一覧

No.	性別	時期/期間	インターン当時の所属・学年	現在(2007)の職業	人物短評
1	女	2004 年 8 月/1か月	フェリス女学院大学２年	フェリス女学院大学大学院修士課程１年	上海出身で、明るく何事にも積極的。国際機関で働くことに関心を持つ。
2	女	2005 年２～３月/1か月半	フェリス女学院大学２年	精密機械会社勤務	物怖じせずマイペース。堂々とした受け答え。インターシップ中に取材した企業に採用され就職。
3	女	2005 年８～９月/1か月半	フェリス女学院大学国際交流学部２年	家電量販店勤務	中国で一度就職をした後、退職して日本に留学。日本での就職活動を勝ち抜き、2007年春から社会人に。
4	女	2006年２月/1か月	津田塾大学４年	津田塾大学大学院修士課程１年	落ち着きがあり、何に対しても緊張するということがない。語学の才があり、中国語の他、日本語、英語も堪能。
5	男	2007 年２～３月/1か月	立命館アジア太平洋大学(APU)３年	立命館アジア太平洋大学４年	芸術のセンスがあり、ニュースレターでは写真、デザインを担当。大学では音楽を通じてのボランティア活動を主催。
6	女	2005 年２～３月/1か月半	フェリス女学院大学３年	立教大学大学院修士課程２年	外国人への日本語教育に興味あり。落ち着いていて、確実に仕事をこなすタイプ。
7	男	2005 年８～９月/2か月	立命館アジア太平洋大学(APU)大学院修士課程１年	政府系金融機関勤務	学士をイギリスで取得した、いわゆる帰国子弟。 途上国における開発 NGO でのインターンなど多くの経験を持つ。
8	女	2006 年２～３月/2か月	桜美林大学４年	明治学院大学大学院修士課程２年	成績優秀者として大学を３年半で早期卒業。落ち着きがあり、確実に黙々と仕事をこなす。
9	女	2007 年２～３月/2か月	桜美林大学４年～卒業後	マーケティング会社コンサルタント	日本社会に疑問を持ち、周囲とただ同調することを避ける。自分探しの途上とも言え、将来は海外の大学院進学を希望。
10	女	2007 年２～３月/2か月	津田塾大学２年	津田塾大学３年	ビジネス文書検定３級を持つ。ものを書くことが好きで、大学では文芸サークルに所属している。

なお、この聞き取り調査にあたっては13人目のインターン[xiv]を新たに雇用した。元インターンたちにとっては、年長者であり、また元雇用者・指導者でもあるUNU-FAPのスタッフが質問するよりも、年の近い学生インターンが質問した方が、より本音に近い意見が聞けると考えたためである。

5、調査結果

上記2の「本原稿の意義と目的」で示した3つの目的にしたがって、以下に10名のインフォーマントの回答内容を分析しまとめてみる。詳細な回答内容については、巻末のAppendixを参照されたい。

(1) 学生たちが国際協力の分野でインターンをしようと思った理由

前項4「UNU-FAPインターンシップ制度の概要と調査方法論」で紹介した6つの質問のうち、主に①と③が本項目の関連質問である。但し、インフォーマントによっては他の質問に対しても関連する回答内容を述べていることがあるので、厳密には①と③のみに限るものではない。

聞き取り調査によれば、本インターンシップを経験する以前に、類似する国際協力関連の実体験（インターンシップ含む）を有する者は、大学・学部までを海外で終えたというインフォーマント7のみであり、極めて例外的である。

本インターンシップに申し込んだきっかけについては、大学から紹介されたからと回答した者が5名、友人などに聞いたりして自ら申し込んだと回答した者が5名[xv]である。大学から紹介されたと回答したインフォーマント1および2は同じ大学の学生であるが、同大学の担当者に確認したところ、声をかける際には誰でもただやみくもに勧めるのではなく、本人の希望や大学での専攻を考慮した上でのことだと説明している。

また、同じく大学から紹介されたと回答したインフォーマント8と9についても、やはり別の同一大学の学生であり、本インターンシッププログラムを彼女たちに紹介したのは、いずれも国際協力関連の科目を受け持つ彼女たちの指導教官である。これらのことから、大学に紹介されてから本インターンシップに申し込んだ学生も、プログラムを事前に知っていて自ら申し込んだ学生も、共に国際協力にはもともと関心があった、ということが大前提のようである。

他方、留学生・日本人を問わず、多くの元インターンに国連でのインターンシップに対する特別な感情が垣間見える。例えば留学生のインフォーマント1は「国連への憧れ」という直接的な表現を用いているし、日本人のインフォーマント7も国際機関で働いてみたかったことを申し述べている。同じく日本人のインフォーマント8は「せっかくの

国連でのインターンなのだから・・」という表現をしており、国連が特別な場所であると考えていることをうかがわせる。

民間企業の中には有給のインターンシップも多いのに、敢えて国際協力分野の無給インターンに志願した理由は、本調査からは必ずしも明らかとならなかった。ただ既述のように、国連だから、特別な機会だから、という理由を挙げた学生が複数いたことは、それらがひとつの大きな動機となっていることを暗示している。

(2) 当初の期待と、実際の経験との溝

前項4で紹介した質問のうち、主に②から④が本項目の関連質問である。但し、インフォーマントによっては他の質問に対しても関連する回答内容を述べていることがあるのは、上記（1）と同様である。

まず、回答内容を字面だけから判断すれば、学生たちが特に大きな期待を予め抱いていた様子は伺えない。但し、上記（1）で説明したように、国連という場所をわけもなく特別視する傾向から、学生たちが当初国連に対して抱いていたイメージと実際に見たものとの落差を、驚きや戸惑いというニュアンスで表現する者が多い。例えば、「国連への憧れ」という直接的な表現を用いたインフォーマント1は、本インターンシッププログラムを通して「国際機関に対する、甘いただの憧れが段々現実的になってきた」と評価する一方、「国際機関は現場から離れている」と痛烈に批判する。本当の留学生事情がわかっていない、というのである。

彼女の指摘は全く正しい。しかしながら、国連大学としてはそれは既知のことであるとも言える。つまり、UNU-FAPがインターンシップを実施する目的は、普段触れ合うことのない留学生個人をインターンとして雇用し、その育成・教育過程で彼らの本音を聞くためなのである。したがって、インターンである留学生が「この人たは私たちのことを何もわかっていないな」と感じたとしても、それはいわば当然で、その意味で彼女の感想は正に正鵠を射ているのである。

他方、雇用者側から見れば、一方的な勘違いに属するようなコメントもある。例えば上記（1）で国連を特別視した例として挙げたインフォーマント8は、「せっかくの国連でのインターンなのだから」という言葉に続けて「ほかの（国連）機関を見る」機会が欲しかったと述べる。同じ国連ファミリーの中でも国連大学と国連難民高等弁務官とは全く活動内容が異なるものの、確かにそのような機会があればインターンはおもしろいと感じるであろう。

しかし、民間企業であればA社が採用したインターンが系列B社の業務内容を視察するなどということはおそらくあり得ないはずだ。仮に社名に「松下」や「トヨタ」が冠

せられていたとしても、関連する会社は幾つもあるのであり、インターンの関心のままにあれこれと下見をされてはキリがない。また、このような勘違いとも言える要望は、規模のより小さなNGOやNPOではそもそも出ないであろう。

以上は国連という場所を明確な根拠もなく特別視したことから派生する、言わば小さな誤解という範疇に属するものと思われる。

より示唆的なのは、元インターンたちが苦痛に感じた、また役に立った・おもしろかったとして挙げた例である。前者の代表が通勤、後者の代表が企業の人事担当者へのインタビューである。両者に共通するのは、いずれもインターン実施前に予想すらしていない事柄であるということだろう。私たちの経験から照らしてみても、こうした一種のサプライズこそが長く印象的な記憶として残る、ということは大いにあり得る話である。詳しくは次の（3）で述べたい。

（3）雇用者側にとっての教訓

前項4で紹介した質問の①から⑥全てが本項目に関連する。今回の結果から見れば、雇用者側にとっての教訓を考える上で、2つのキーワードがあるように思う。最初のキーワードはコミュニケーションである。これには大きく分けて、1）雇用者とインターンとのコミュニケーション、そして2）インターン同士のコミュニケーション、の2つがあるだろう。例えば、多くの元インターンがUNU-FAPのオフィスが静かであること、そして電子メールを使い過ぎであることを指摘している。ある程度の事実を含む観察ではあるものの、雇用者側から見れば、優れて知的生産の場であるUNU-FAPのオフィスが静かなのは言わば当然の話である。多くの学生がアルバイトをするような居酒屋やハンバーガーショップとは違っていてもおかしくないのだが、この点に思い至る学生は少ない。

また、電子メールについても誤解と思われる部分が少なくない。学生時代には主に携帯電話を使った、友人との1対1のコミュニケーション手段として電子メールを使うことが多いのではないだろうか。これに対して、企業活動などにおいては、電子メールは1対多、つまり複数の対象者に同じ内容のメッセージを伝える場合に用いられることが多く、筆者にはむしろこの方が電子メール本来の機能であるように思われる。

UNU-FAPでも、スタッフの人数こそ確かに多くはないものの、それでもいちいち全員を集めて会議をしたり、情報を伝えたりすることは時間も手間もかかるし、それ以上に個々のスタッフの業務を中断することにもつながるので、余り生産的とは言えない。UNU-FAPのオフィスで日常のコミュニケーション手段として電子メールが主に用いられるのはそういった理由がある。

さらに、UNU-FAPのスタッフが定時に帰ることが多いという指摘をしたインフォーマントがいる。確かにスタッフはオフィスを出るのだけれど、その後外部でセミナーに参加したり、全国の大学関係者、プロジェクトのドナー（本プロジェクトUNU-FAPの場合には外務省と国際協力銀行）とのミーティングをこなしたりしていることが学生には見えない。

また、（UNU-FAPのスタッフは）ニュースレターが出来たことだけで満足している、という厳しい指摘をしたインフォーマントに至っては、何をもってそのような感想を持つに至ったのか、皆目見当がつかない。何故なら、このニュースレターがUNU-FAPのスタッフによって配布されるのはインターン期間終了後の話であり、インターンにはそれがどのように有効利用されるのかわからないはずなのである。

上で挙げた例の多くは、かなりの部分、誤解に基づくものと考えられる。このような誤った観察や感想については、雇用者側として十分な背景説明を行う必要があると思われる。その上で、例えば上の例でニュースレターがぞんざいに扱われていると判断したインフォーマントが、どのような根拠があってそう判断したのかが明らかになると思われる。雇用者とインターンとのコミュニケーションは双方にとって利益のあることなのである。

しかし、そうしたコミュニケーションを最大限尽くしても、インターンの持つ感想に個人差が生じる可能性は否定できないであろう。例えば、インフォーマント5と9は同時期にインターンを行い、共同してニュースレターを作成したのだが、一方はニュースレター制作について自由がなかったという感想を漏らし、もう一方は自由だったと好意的な評価を下している。この例に限らず、インフォーマント5は様々な場面で自らのインターンシップについて否定的な感想を述べており、どのような経緯でそのような不満を持つに至ったのか、今後のプログラム改善のためにも、雇用者側はこのようなインターンこそ最優先でコミュニケーションをとることを心がけるべきではないだろうか。

インターン同士のコミュニケーションも同様に注意が必要だ。留学生とのコミュニケーションが想像以上に大変だったという感想を述べた日本人インフォーマントが複数いることはその証左である。本プログラムでは、草の根レベルの国際協力・異文化理解という観点から、留学生インターンと日本人インターンを組み合わせて採用し、ニュースレター作成という共同作業に携わってもらうことを原則としている。そのため、この点のチームワークがうまく働くか否かは国際協力分野のインターンシップである本プログラムが、成功するか否かの分岐点でもあるのである。本プログラムでインターン同士のコミュニケーションが重要だと考えるのは、そのような理由からである。

興味深いことに、留学生の側から「日本人インターンとのコミュニケーションが大変

だった」と感想を述べた者はいない。これは、留学生は既に日本に来た時点で異文化理解の厳しい現場に投げ出され、それなりの経験を積んでいるのに比べ、多くの日本人学生は本インターンシッププログラムで初めて本格的に留学生という身近な異文化と触れ合うことになるからだ、と考えれば理解しやすい。、

2番目のキーワードは自信である。これは上記3の先行研究（3）で述べた、楠奥の自己効力感、バンデュラの効力期待とほぼ同義である。今回のインタビューでは、全ての元インターンがほぼ例外なく何らかの自信をつけたと回答している。楠奥やバンデュラの仮説が正しいとすれば、国連大学のインターンシップで得られた自信は、彼ら元インターンたちの次の積極的な行動につながるはずである。言い換えるならば、彼らの人間的な成長にこのインターンシップ制度は少なからず寄与したと言えよう。

けれども一方で、次のような2つの事例にも同時に目を向ける必要がある。ひとつは、同僚の優秀な日本人インターンと自らを比較し、時が経つにしたがって逆に自信を喪失していく留学生インターンのケース（インフォーマント3）、そしてもうひとつは、自分には与えられた仕事以上のことができたはず、とやや過剰気味の自信を持つ日本人インターンのケース（インフォーマント9）である。自信というキーワードから考えれば、この2つのケースは言わば両極端に位置するだろう。しかし結果としては、どちらもやる気の喪失へとつながるので、指導する側としては時々声かけをするなど、注意深いケアが必要であろう。最初のキーワードであるコミュニケーションは、このような場合にも重要である。

以上見てきたように、UNU-FAPのインターンシップに関する限り、インターン志望者たちの意識やモチベーションは高く、ほぼ例外なく本インターンシップを通じて人間的な成長も遂げる。やり終えた仕事に対する満足感も高く、他人の役に立てたと喜ぶ元インターンも複数いる。また、一口に国際協力と言っても、留学生用のニュースレターを作るという地道な仕事も必要なのだ、ということがわかり、この分野の多様性を理解したようだ。しかし他方、不必要な誤解や不満を最後まで持ち続けたりする場合も散見されるので、雇用する側としてはできるだけ頻繁に、様々なレベルで意思疎通をはかる必要がある。アルバイトとインターンシップの違いはまさにそこにある。本稿はたまたま国際協力分野でのインターンシップを題材としたが、社会人としての経験が未熟な学生を指導するという意味では、コミュニケーションの重要性はおそらく他のどのような分野・業種においても同じであろう。比較のため、他の分野においてもより多くの同様の研究がなされることを希望する。

注と参考文献

i大西好宣「国際協力・開発分野におけるインターンシップ制度の拡充を」、『国際協力プラザ』1999年11月号pp.24-25.
ii 大西好宣「国際開発戦略としてのインターンシップ」、『国際開発ジャーナル』2000年5月号pp.28-29.
iii 中央教育審議会2005年1月答申
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm)
iv http://www.fps.chuo-u.ac.jp/~iip/aboutiip.htm
v http://www.obirin.ac.jp/international/gaiyou/aisatu.html
vi 木村孟「インターンシップ推進の意義」、文部省インターンシップフォーラム2000基調講演、2000年
vii 山崎憲・大谷利勝「インターンシップと就職支援—日本大学生産工学部—」、『IDE現代の高等教育』2005年2月号（No.467）pp.41-45.
viii 楠奥繁則「自己効力感からみた大学生のインターンシップの効果に関する実証研究—ベンチャー企業へのインターンシップを対象にした調査—」、『立命館経営学』2006年1月（第44巻第5）号pp.169-185.
ix 河地和子『自信力が学生を変える』平凡社新書、2005年
x Bandura, A. "Self-efficacy," Psychological Review, Vol84 （1977）, pp.191-215.
xi 1997年の経済同友会による調査
xii http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/12/06121105.htm
xiii これまでの例では、日本航空や旭化成、HISなど。
xiv 桜美林大学の卒業生である佐藤美春氏（2007年12月現在、インド・デリー大学大学院生）である。彼女にはこの場を借りて心から謝意を表したい。
xv内訳は、留学生が3名、日本人が2名で、一見したところ留学生の方が積極的な印象であるが、自ら申し込むには、そもそもUNU-FAPという貸付型奨学金事業の存在を知っていることが必要だ。UNU-FAPはもともと留学生のための事業なので、日本人がそれを知らなかったのは当然のように思える。

インフォーマント1[1]　　Appendix

性別:　女性　（留学生）

インターン当時の所属・学年:　フェリス女学院大学2年

インターン期間:　2004年8月～9月の2か月間

日数/週:　2～3日

現在（2007）の職業:　フェリス女学院大学大学院修士課程1年

1. 大学でUNU-FAPの説明会があり、奨学金を申請したら、大学からインターンシッププログラムについても紹介された。実際の応募に際しては特に大学からの協力はなかったが、プログラムそのものの学内での宣伝はしている。

2. a)　一番最初のニュースレターだったので、自分の希望や考えが取り入れられた。自由な感じでやらせてもらえた。同じインターン仲間との交流や、ニュースレター作成に当たっての取材は楽しかった。また、ラウンジでの昼食時など、国連のほかの機関でインターンをしている人と会って話す機会があった。お互いの話をすることで刺激になった。

   b)　一番初めだったのでモデルがなく、（ニュースレターを）どういうふうに作っていったらいいのかわからなかった。アイデアを出すことが大変で、とにかくスタートしにくかったという記憶がある。国連の発行物を作るというプレッシャーもあった。その他、自分にPCスキル、知識がなかったことも大変だと感じた。UNU-FAPのスタッフの方にたくさん教えてもらった。

   c)　国際機関に対するイメージが変わった。一般企業とは違い、働く環境が厳しくなくゆったりしている、自分の仕事をこなせばOK、など。民間だと、全員がひとつの目標に向かっているのを感じたが、UNU-FAPは違った。自由という印象がある。また、オフィスが静かだったことにも驚いた。余りに静かで、落ち着かないことがたまにあった。オフィスの中のコミュニケーション方法はメールばかり。それが国際機関のやり方なのだろうか。オフィス内でのコミュニケーション方法をもっと豊かにすればいいと思った。自分自身はスタッフ、インターン仲間とのコミュニケーションで特に苦労しなかった。

   d)　国連への憧れという一点に尽きる。国連大学でインターンをしているという自

分に満足していた。

e)　このインターンは、自分のキャリアを考えた時、やはり大学院に行くべきだと思った最初のきっかけになった。

3. 国際機関の内部、仕事の流れ、一般企業との違いを見てみたかった。また、英語力が高まるのではないかとも思った。期待することなどは特になく、ただただ国連に行けるということにわくわくしていた。

4. 自分の将来が明確になってきた。自分の中の考え方が変わった。国際機関に対する、甘いただの憧れが段々現実的になってきた。

5. 留学生は特別なグループだと思う。もし将来日本で働くならば、日本人ができないことで、私ができることはなんだろうかと常に考えるようになった。2つの国のバックグラウンドを持っている自分は民間の会社でも特別な貢献ができるのではないかと考えている。

6. UNU-FAPでインターンをしてみて、国際機関は現場から離れていると感じた。UNU-FAPの場合は、スタッフも日本人ばかりだったし、留学生が本当に困っていること、留学生の事情をもう少し把握するべきだと思った。在日留学生の考えていること、困っていることを知り、生の声をくみ上げるために、留学生のインターンをもっと募集するべきだと思う。多くの留学生にアプローチすることで、本音が聞けるのではないか。そもそも宣伝の仕方がよくない。フェリス女学院大学は留学生の数が少なく、留学生一人一人に情報を伝えやすい。しかし、規模の大きな学校では留学生の間でのUNU-FAPの認知度は低いのではないか。もっと宣伝方法を工夫するべき。同じ国からの留学生は集まりやすいので、そのコミュニティーをうまく使って広めていけばいいのではないか。あと、心に残る出来事としてUNU-FAPのスタッフの方々が大好きになった。各種のイベントも楽しかった。

インフォーマント2
性別: 女性　（留学生）
インターン当時の所属・学年: フェリス女学院大学2年
インターン期間: 2005年2月～4月の2か月間
日数/週: 3日
現在（2007）の職業: 精密機械会社勤務

1. 大学から声がかかった。

2. b) 朝の満員電車に乗って二時間以上もかけて通勤しなければならなかったことなど。

   c) 特にない。

   d) 自分の時間は犠牲にしても、誰かのためになるということが私のモチベーションを上げてくれた。

   e) 自分と同じ発展途上国から来ている留学生に役に立つ情報を提供し、自分たちが作るニュースレターが少しでも多くの人のためになったらいいなという思いで毎日頑張っていた。

3. 自分の視野を広げると同時に、国連大学そのものをもっと深く知りたかった。また、そこで働いている人々のモチベーションなどを知りたかった。

4. （回答なし）

5. UNU-FAPでのインターンシップは、私にとっては人生の転換期だったと思う。というのは、このインターンシップを通して今の自分が勤めている会社を知ることができたから。

6. 特になし。

インフォーマント3
性別:　女性　（留学生）
インターン当時の所属・学年:　フェリス女子大国際交流学部2年
インターン期間:　2005年8月～9月の1か月半
日数/週:　4日
現在（2007）の職業:　家電量販店勤務

1. 自分の前に同じ大学の2人がインターンをしており、彼女らの経験を聞いて興味を持った。インターンシップをする前にUNU-FAPのエッセイコンテストで賞をいただき、表彰式の際に国連大学のスタッフに会ってインターンを申し出た。UNU-FAPの紹介やインターンの応募に関しては、大学の海外交流課が扱っていた。

2. a)　ニュースレターの取材で訪れた、企業でのインタビューが印象に残っている。そして、新しいことに挑戦する、という気持ち。

   b)　幾つもある。例えばメールの書き方。学生から社会人への意識の切り替え。社会人としてのマナー。これは例えば、欠席時の連絡方法も、口頭だけではなくメールなど形に残してしっかり伝えなければならない、など。連絡が確実に伝わっておらず、失敗したことがあった。すべてにおいて指示を受け、常に誰かに隣でチェックしてもらわなければならなかった。仕事が遅い、要領が悪い自分との葛藤。同期のインターン仲間はとてもできる人で、自分もそうなりたいと思っていた。あと、企業インタビューで話してくれたことをまとめるのが、想像以上に難しかった。なかなか終わらず、家に持ち帰って作業することも多かった。日本語を「書く」ことも大変だった。

   c)　国連大学には小さな組織がたくさんあって、お互い毎日連絡を取り合っていること。それらが国連というひとつのコミュニティを作り上げていること。UNハウス[2]内のコミュニケーションは英語でとられていたこと。

   d)　休みたいと思うこともあったが、今日は自分はこれができた、という前向きなことを考えていた。

   e)　UNU-FAPの事業は、献身的なもので、とてもいい事業なのに、知らない留学

生が多いのが残念。スタッフの中には、親しみを感じる人もいれば、個人主義的な感じの人もいて、お互いに気を使い合っていた。時々スタッフの1人がケーキを買ってきてくれて、みんなで仕事以外のいろんな話をするのがとても楽しかった。

3. 編集に興味があったわけではなく、インターンシップとはどういうものか知りたくて始めた。また、少しでも留学生の役に立てれば、と思った。企業へのインターンシッププログラムもあったが、国連で働く機会は余りないと思った。

4. どんなことをやるのだろうか、自分にできるだろうかと心配や不安はあったが、特に期待というものはなかった。何でも挑戦、という気持ちで臨んだ。

5. 一番大きかったのは、メールのやりとり。今の会社にアプライするとき、その選考過程全てがメールで行われたので、インターンでの経験がとても役に立った。一度、母国の中国で働いた経験はあるが、日本の大学に来て気分は学生に戻っていた。そういう時にもう一度、社会が、しかも日本の社会が見られたので勉強になった。

6. 就職活動とインターンシップの両立が難しかった。結局、自分は最後までインターンを続けることができなかった。1か月半～2か月のインターンは、留学生にとっては負担が大きく、無理だと思う。生活に追われている学生が多く、交通費や昼食の出費も大きい。企業のインタビューを増やし（大企業や有名企業だけでなく、その他中小企業も）、留学生にできるだけ多くの企業を紹介したらいいと思う。今は、留学生枠を設けない企業も多いので、「留学生の」だけではなく「日本人の」就職活動のやり方を取り上げるべき。就職活動の始め方についてなど、ニュースレター作成に当たっていろいろなサイトがあることを知って、自分でも活用することができた。それから、スタッフの方々はとても優しくてよくしてくれた。ただ、もっとオフィスの中でお互いがコミュニケーションを取ればいいのではないかと思った。

インフォーマント4
性別:　女性　（留学生）
インターン当時の所属・学年:　津田塾大学4年
インターン期間:　2006年2月の1か月間
日数/週:　5日
現在（2007）の職業:　同大学大学院1年

1. 大学の国際センターでパンフレットをもらってUNU-FAPの奨学金プログラムに応募し、それでインターンシッププログラムのことも知った。同センターが宣伝しており、協力もしてくれた。ほかにも奨学金はあったが、ほとんどが給付型で枠が少ないので、UNU-FAPのものを選んだ。自分でもUNU-FAPのニュースレターを読んでいて、就職情報の取材や執筆について自分でやっていくことは、おそらく自分のためにもなるのではないかと思った。

2. a）大学以外の人たち（日本の社会人）と接すること、話をすることが楽しかった。寝坊して遅刻するとスタッフの方に正直にメールをしたら、これは社会に出たら良くない（電車が遅れたなどと言うべき）とアドバイスしてくれた（笑）。そのような細かいところについても勉強になったと思う。インタビューのための企業訪問も楽しかった。この先自分が就職する時、どうしたらいいか少しわかった。

   b）日常生活で「話す」ことはできるが、日本語を「書く」ことが難しかった。それから、ニュースレターを作るうえで、イメージはあっても、それを形にするのはなかなか思い通りにいかなくて難しかった。そして通勤。片道1時間半もかけた。朝も帰りも混むので大変だった。

   c）UNUの中で省エネを実践していたこと。UNU-FAPのオフィスは暖房があまり効いていなくて寒かったし、エスカレーターはイベントがない時は動かなかった。簡単そうに見えるけれど、ニュースレターの1ページを作るにもたくさんの時間がかかる。細かいところまで気を配らなければならないし、仕事は大変だと思った。

   d）留学生として、また津田塾からの代表として来ているというプレッシャーがあった。自分ひとりだけではなく、いろんなものが背景にあるから、ないがしろにはできないと思っていた。UNU-FAPは、自分も受けている留学生のための奨学金プ

ログラム。これに対する恩返しという気持ち。

e) 小さいオフィスの中で、スタッフの人がメールでやりとりをしているのに驚いた。もっと口頭でのコミュニケーションを取ればいいのにと思った。

3. ニューレター作成のスキルが身につくのではないかと思っていたが、実際は、ノウハウの指導もなくまかせられたので苦労した。始める前に、レクチャーや過去のインターンの先輩と話をする機会があればいいのにと思った。もっと多くの留学生に会えると思ったが、会えなかった。もっと多くの留学生の声を聞けたら、いろんなことが書けるのではないかと思った。

4. 編集のスキルは始めたときよりは伸びたけれど、それほどでもない。それ以上に得たものは、留学生の就職情報。そして多くの方と話をして、自分のネットワークができたこと。

5. ワードのタイプスピードが上がった。それから敬語の使い方を覚えた。

6. インターンの人数が少ない。もっとメンバーを増やしてニュースレターのページ数を増やし、留学生のためになる情報を盛り込めたらいいと思う。内容としてはやはり就職について。例えば、これまでは有名な会社にばかりインタビューに行っていたが、中小企業も取り上げて、留学生みんなで情報をシェアできればいいと思う。大学時代のひとつの思い出として貴重な経験だった。UNU-FAPでの（インターン仲間、国連大スタッフとの）コミュニケーションは問題なかった。同じインターンもスタッフの人もみんなとても優しくて、もう少し厳しくしてほしいと思った。みんな優しく丁寧で、こんな甘い環境の中では成長できないのではないかと思った（笑）。

インフォーマント5
性別:　男性　（留学生）
インターン当時の所属・学年:　立命館アジア太平洋大学（APU）3年
インターン期間:　2007年2月～3月の1か月半
日数/週:　不定期
現在（2007）の職業:　同大学4年

1. UNU-FAPのパンフレットを見た時から知っていた。その時以来、インターンシップは国連大学がどのように留学生をサポートしているのか学ぶ良い機会だと思っていた。最初は、東京での滞在費用が自己負担であるため、このプログラムに参加するのは難しい、または不可能だと思っていたが、何とか参加することができて良かった。

2. a)　休憩中にスタッフや同じインターンと交流すること、お互いの話をすることが楽しかった。

   b)　自分にとって、東京での滞在自体が大変だった。住む場所や、就職活動、また、東京にいる友達やその他の人と会うこととインターンシップとの両立が難しかった。また、インターンシップができるかどうかは自分の経済状況と上京前のアルバイトにかかっていたので、準備全体が大変だった。

   c)　オフィスがいつもとても静かだったこと。

   d)　個人的に、インターンシップへの参加は、APUに入った時経済的に厳しかった自分をサポートしてくれたこの制度に対し、感謝の気持ちを表す意味があった。また、このプログラムはいろいろな人たちに出会えて交流でき、日本の環境の中で働くことについてさらに学べる良い機会だと思った。

3. ニュースレターのような発行物を作成するスキルを磨くこと。自分はほかのインターンより少し遅れて働き始めたのだが、それまでに同期のインターンが作ってきたニュースレターを完成させ、さらに良いものにするため積極的に貢献したいと思っていた。

4. プランニングプロセスの一つ一つの段階を欠席せず、プログラムのスタートから参加できるようにもっと時間と財源があればよかった。UNハウスで行われるセミナーに出席する機会や、インタビューを通して国連大学の学長に会う機会が与えられたことを嬉しく思う。ニュースレター作成に当たって多くの自由があったし、柔軟性が与えられたことに感謝している。ただ、ニュースレターのレイアウトに使うソフトウェアの勉強に多くの時間を費やしたので、写真編集や良いレイアウトを作るため、自分に最初からもっとスキルがあったら良かったと思った。

5. もちろん役立っている。たくさんの経験を得たことは現在、自分の財産として残っている。日本における仕事の「現場」で働いたことで、学んだことの全てを今でも大切にしている。インターン時代を振り返ると、改善点や反省点も挙げられるけれど、それらの経験は同時に、外国人としての自分が日本をさらに理解しようとする時、以前より注意深く判断し、かつ行動することにつながっている。

6. 今後、さらに多くの人がこのインターンシッププログラムに参加してくれることを願う。また、ニュースレター作成だけではなく、もっと多くのフィールドワークがあって、国連のほかの機関を訪れるなどUNU-FAPの外と触れ合う機会があったらいいと思う。また、遠方に住む、このインターンシップに関心のある学生に対して、東京での滞在費の支援があればいい。実際、滞在費の問題は、自分がプログラムへの参加、不参加を決める際にぶつかった第一の大きな障害物だった。しかしながら、全体としてこのプログラム自体は、UNU-FAPや、どのように途上国からの留学生をサポートするのかを知るのに良い機会だと思う。同じインターン仲間やUNU-FAPスタッフの皆さんの親切に感謝している。

インフォーマント6
性別:　女性　（日本人）
インターン当時の所属・学年:　フェリス女学院大学3年
インターン期間:　2005年2月～4月の約1か月半
日数/週:　5日
現在（2007）の職業:　立教大学大学院修士課程2年

1. インターンのプログラム自体は、自分の前の年にUNU-FAPでインターンをしていた同じ大学の友人に教えてもらった。応募は、大学の就職課を通して行った。インターンシップの宣伝は就職課でもしていたようだが、自分は友人に教えてもらったので、大学がどのように宣伝していたかはわからない。また、留学生向けには国際交流課という部署がインターンの募集をしていたようだ。

2. a)　ニュースレターを作る際、アンケートなどに協力してくれた留学生とのメールのやりとりが思い出深い。日本で生活する留学生たちの本音が聞けた。

b)　初めての経験である「通勤」が大変だった。片道1時間以上かけて通っていたため、ラッシュの電車に乗るだけで疲れてしまった。

c)　スタッフのお子さんが風邪をひいたときに、病院に連れて行くということで遅れて出勤してきたこと。一般企業だとなかなかできないことだと思うので、驚いたというより、こういう環境や雰囲気を日本の企業も取り入れるべきではないかと思った。

d)　無給というのは始めからわかっていたし、せっかくの機会なので、なるべく休まずに通うと決めていた。自分のやりたいことというよりは「こうしたらもっと良くなるだろう」ということを考えながらニュースレターを作っていた。

3. ちょうど進学しようか就職しようか悩んでいた時期だったので、インターンシップをして働くことを身近に感じたいと思い応募した。また、UNU-FAPでは職員の方々や留学生など国際色豊かな方々と交流できると思い、楽しみにしていた。

4. 実際、積極的にあれもしたい、これもしたいと望んだり期待していたものは余りな

かった（笑）。だが、自分の将来を考えるために、アルバイトとは違う形で働く経験をしたい、という気持ちで臨んだ。実際にUNU-FAPでインターンをして、大変なことも楽しいことも含めてとても良い経験になった。また、大学院を修了された職員の方が多いので、大学院でのお話や修了されてからのキャリアなどの話を聞けたのも有意義だった。

5. まだ働いていないので何とも言えないが、働き始めたらきっと役に立つと思う。UNU-FAPの皆さんと働いて、チームワークの大切さを感じた。UNU-FAPでは普段は一人一人自分の仕事をしているが、ほぼ毎日全体での会議があって、そこで自分の仕事を報告し合っている姿が印象的だった。将来、自分が働き始めたら一緒に働く人たちとのコミュニケーションを大切にしたいと思う。

6. 特になし。

インフォーマント7
性別:　男　（日本人）
インターン当時の所属・学年:　立命館アジア太平洋大学（APU）大学院修士課程1年
インターン期間:　2005年8月～9月の2か月間
日数/週:　5日
現在（2007）の職業:　政府系金融機関勤務

1. UNU-FAPのスタッフの方がAPUに出張（受給生向けの説明会）に来ていた時に強引に話しかけ、後日メールをいただいて始まった。UNU-FAPについて、自分は日本人だったのであまり情報はなかったが、大学の留学生サポートのHPでは紹介されていた。インターン応募の際、所属する大学からの協力は特になかった。

2. a)　ニュースレターについて、大きな全体のビジョンはUNU-FAPのスタッフから教わったが、後は自分で好きなようにしてよいという、オープンな感じが楽しかった。前回のニュースレターから良いものは盗み、あと何を盛り込むか、同じインターン仲間と話をして決めていくのが面白かった。スタッフの人とのコミュニケーションが楽しかった。卓球大会などのイベントも楽しんだ。その他にも、ニュースレター作成に当たって国連大学の広報の人にアドバイスをもらう機会もあり、勉強になった。

   b)　ニュースレターが、全部ワードで手作りだったこと。それまでワードを使うのは論文作成時などのみだったので、ワードのPDF化も初めて知ったし、新しいことをたくさん知った。ただ、完成が当初のタイムスケジュールから大幅に遅れてしまった。タイムマネージメントをする上で、生じる作業がどんなものでどの程度の量か、把握できていなかった。

   c)　特になかった。アルバイトや海外での生活、インドのNGOでのインターン経験があったからかもしれない。NGO、特に小さいところでは、人手がないので自分の持っている能力全てを提供しなければならなかった。その経験が役に立った。

   d)　無給だからできないこと、という考え方はしなかった。むしろ、モチベーションを保つのに大変だったのは、相手からの連絡待ちで作業が滞ってしまった時だった。国連大学のセミナーに出てみたり、紹介された人と会ったりしたこともモチベ

ーション維持に役立った。総じて、余り無給どうのこうのということを考えなかった。ただ、（地方からインターンに来る人は住居費だけでも大変だと思うので）自分は東京に実家があって良かったと思った。

e）絶対いいニュースレターを作ってやろうと思っていた。留学生が読んでためになるのはどういうものかを考えていた。APUにいてもわかるが、外国の人が日本に住んで何が大変かというと、コミュニケーション。留学生の気持ちが楽になると、それによってコミュニケーション能力も上がる。ニュースレターでは就職について扱うことを決めていたが、特集で世界遺産を取りあげたのは、日本にある世界遺産をひとつでも知っていると、日本人との会話が広がるのではないかと考えたから。

3. 昔から国際機関で仕事がしたいと思っていて、国連機関でインターンをしたいという思いが第一にあった。ちょうど自分の大学にUNU-FAPのスタッフの方が来ていて、これは声をかけるしかないと思った。「機関紙を作る」ということだけを考えて始めたので、特に何かを期待するということはなかった。アルバイトやその他の活動で直前まで忙しく、あまり考える時間もなかった。本当にインターンについて考え始めたのは1週間前で、申し込み用紙の提出期限が遅れそうでUNU-FAPのスタッフの方に催促された（笑）。

4. 何かを期待していたかどうかは別として、とても満足している。国連大学の内部にいて職員の方と話をしたりすることで、外から見る国連大学とはまた違った見方ができるようになった。ニュースレターを作る上で技術的な面でも勉強になった。どのように仕事をしているのか、内部の様子を見ることができた。UNU-FAPでのインターンは、それで終わってしまったのではなく、今にもつながっている。

5. ワードの技術。今の仕事では、説明資料を大量に作る。様々な仕事を抱えている忙しい上司に、いかに文章をわかりやすく簡潔にまとめて見せ、納得させるかが重要。「編集」の視点から見て、見やすさを工夫したり。相手のことを考えて作成する、ということを学んだ。年配の方が相手なら、フォントは14でサブタイトルは白抜きなど。加えて、仕事としてのコミュニケーションの取り方。それまでは、友達としてコミュニケーションが取れればよかったが、それとはまた違うスキルが必要だということを学んだ。

6. UNU-FAPというプログラムに関して一言。お金を借りるという行為は真剣なことで、UNU-FAPは、それに留学生の生活がかかっているようなプログラム。生真面目に行こうと思えば生真面目になり過ぎる。けれど、そこをいかに楽しんで、みんなで協力しあい、その結果、UNU-FAPのおかげで充実した生活が送れる、と留学生に思ってもらえるか。そのために、ニュースレターもポップな感じにするなど工夫をして、全く関係のない人でも手にとってもらえるようなものでありたい。UNU-FAPのやっていることを、留学生だけでなく日本人の学生も知っていれば、その人の世界や考え方が広がると思う。本当の“アウトリーチ[3]”という意味で、殻にこもるのではなく外に発信していくような、そんなプログラムであってほしい。

インフォーマント8
性別:　女性　（日本人）
インターン当時の所属・学年:　桜美林大学4年
インターン期間:　2006年2月～3月の2か月間
日数/週:　5日
現在（2007）の職業:　明治学院大学大学院　修士課程2年

1. 大学のゼミの先生に紹介されて。インターンシップにはもともと関心があり、国連の仕事にも興味があったのでやってみようと思った。始めるにあたって大学からの協力は特になかった。ポスターは貼ってあるかもしれないが見えない。もっと大きく募集をしたら希望者は多いと思う。

2. a)　説明力がついた。自分が聞きたいことを、どうしたら相手に伝わるかが勉強になった。うまく伝わると嬉しかったし、成長したなぁと思った。コミュニケーションがうまく取れたときは楽しいと感じた。

   b)　伝えること。同じインターンやインタビューに行った企業の人に自分の言いたいことをうまく伝えること、彼らとコミュニケーションを取ることは難しかった。社会に出たことのない学生が大人相手に、時間を作ってもらっているというプレッシャー、話が止まってしまったらどうしようなどという不安があった。また、ワープロで文章を打つときも、間違った日本語は使えないし、留学生にわかりやすく作

らなければならないと思い気を使った。同じく、ニュースレター作成に当たって、自由にできたのはいいといえばいいが、何から何まで全て自分たちでというのはやはり大変だった。通勤も大変だった。

c) オフィスが静かなこと。みんなマイペースでがつがつしている感じではないこと。5時半にはしっかり帰っていた。そしてパーティーがあること。日本の会社とは違うと思った。

d) やはり中だるみはした。国連のイメージと、内部の事務の作業が乖離していて、自分はどうして来ているんだろうと思った時もあったが、やり始めたからには最後までしっかりやらなければ、と思っていた。ニュースレターが形になってくると、嬉しかったしやる気が出た。

e) 留学生とは、学校で話したことは今までもあったが、共同で何かを作り上げる、作業をするとなると、仮に相手が日本語のできる人であっても、日本人を相手にしているのと比べるとやはり難しいと思った。ただ仲がいいだけではだめで、コミュニケーションが必要なことがわかった。学校では遅刻しても自分のことだからよかったが、職場では時間もしっかり守らなければならないのでプレッシャーだった。それに加え、お茶の出し方、電話の出方など、細かいところが難しかった。

3. 国連大学ということで、国連の仕事の一端を担えるのが魅力的で楽しみだったが、意外と事務作業が多かった。留学生とは単純に仲良くなれると思っていたが、一緒に作業していると、必ずしもそうはいかない。共同で作業することの大変さが後になってわかった。そういう勉強ができてよかったと思う。

4. 期待していたことの7割は得られた。留学生とのやりとりという面では達成できたが、他の国際機関を見る、仕事を知る、という目的は達成できなかった。

5. 役立っている。例えば、物事をわかりやすく説明すること。思いつきでしゃべるのではなく、どういう風な言い方をしたら相手に伝わるのかを考えながら話すようになった。職場とは、働くとはどういうことかを少しだったが垣間見ることができた。

6. せっかくの国連でのインターンなのだから、プログラムにほかの機関を見るということを入れてほしい。ひたすらニュースレター作成なので飽きてしまう。このインターンシッププログラムを大学でもっと宣伝すべき。希望者はたくさんいるはず。国連内のセミナーに参加することができたのが良かった。

インフォーマント9
性別:　女性　（日本人）
インターン当時の所属・学年:　桜美林大学4年生（早期卒業後）
インターン期間:　2007年2月～3月の2か月間
日数/週:　5日
現在（2007）の職業:　マーケティング会社コンサルタント

1. 大学のゼミの先生に紹介されて。先生が窓口になってくれた。それまではUNU-FAPインターンシッププログラムの存在を知らなかった。学内では広告、宣伝など見たことがない。それまで、インターンに限らず、自分に時間がある時に何かやりたいと思っていた。

2. a)　最初の、国連大学ビルの中の雰囲気。大きいし、家具が素敵だと思った。

b)　大学や高校での友達は似たもの同士が集まるが、職場ではそれぞれが自分のセンスや考え方を持っていたこと。同期のインターンの中でもタイプに違いがあった。インターン間の、またスタッフの方とのコミュニケーションに苦労した。

c)　UNU-FAPのオフィスがとても静かで、それぞれが黙々と仕事をしていたこと。国連は思ったより大きかったということ。組織が様々に分かれていて、組織間のコミュニケーションは全くないのだな、と思った。

d)　何もしないより、何かしていること、或いは感じることに意味があり、UNU-FAPでのインターンでも何かしら学ぶことがあるだろう、学ぶはずだと思ってた。しかし、週5日の出勤は大変だった。

e)　自分は、学問的なところでキャリアを伸ばすより、民間企業でバリバリ働きた

いタイプだとわかった。UNU-FAPの印象は、スピードが遅く能率が悪い。ニュースレターを作る上で、時間をかければいいものができると思っている気がする。ニュースレターは、もっと自分の好きなように作れると思っていたが、内容の大枠が決まっていて、まかせられたのは特集のところだけだった。いろいろと提案、指示され（してくれ）、自由にやらせてくれる感じではなかった。インタビューの緊張感、プレッシャーは良かった。インタビューはいい経験だった。

3. インターンは仕事に近いから、「働いてみたい」「仕事をしてみたい」という気持ちがあった。国連でのインターンというのも、あまり機会がないことだったので、やってみようと思った。国連の中の様子が見えること、仕事の能力が身につくことを期待していた。

4. 「仕事」というものがわからなかったから、漠然と何か自分の能力が高まるだろうと思っていた。けれど結果的には、精神面で苦労する反面、能力的にうまくいかないということはなかった。自分はこれができない、こうなりたいのに、という葛藤がしたかった。自分が求める能力（具体的にはうまく言えないが･･･）は、ニュースレター作成には使われない能力だったのかもしれない。ニュースレター作成に関して、UNU-FAPは結果を求めない。どうしたら多くの人に読んでもらえるかというよりも、完成させればOKという感じだった。民間企業とそうでないものの違いなのだろうかと思った。

5. 大きなところでは役立っていると思う。例えば仕事上での人間関係。やりたくないことはやりたくない、違うものは違うと思っていたが、長年やっている人の意見を聞いて受け入れることの大切さ、タイプの違う人とチームとしてやっていくことの難しさと大切さ、また、仲間との意見のぶつけ合いと引き際を学んだ。今の会社では編集作業はしていないので、ニュースレター作成のための個別具体的なスキルは特に役立っていない。

6. 編集が好きな人には良いインターンシッププログラムだと思う。もっと、事業の運営に関われるプログラムもあったらいいと思う。

インフォーマント10
性別:　女性　（日本人）
インターン当時の所属・学年:　津田塾大学2年
インターン期間:　2007年2月～3月の2か月
日数/週:　5日
現在（2007）の職業:　同大学3年

1. 大学の国際センター（留学希望者が出入りするところ）に友達が出入りしていて、始めは友達が紹介されたが彼女はできないということで、自分に話が来た。書くことが好きなので、ニュースレター作成に興味を持った。国連大学に出入りできるのも面白いと思った。大学の宣伝については、当時はあまりインターンシップに関心がなく、自ら求めていたわけではないので詳しくはわからないが、宣伝していた記憶はない。担当部署の人に言われるがままに書類をそろえ、国連大学スタッフとの面接に出向いた。

2. a)　オフィス内でのスタッフやインターンとのやりとり。長い間PCに向かって疲れてる時、周りの人と話すのが気晴らしにもなったし楽しかった。気持ちが落ち込んでいる時、スタッフの方が外に連れ出してくれたりもした。

   b)　英語力のなさ。英語が話せないのは無能だなとさえ思った。必要な時に話せなくて落ち込んだ。PCに1日中向かっていて、携帯電話を見るのも嫌になった。インターン3人での分担作業、情報共有が難しかった。空気（雰囲気）を変えるのが大変だった。

   c)　UNU-FAPのスタッフが6人で、みんな日本人だったこと。職場というのはもっと慌てふためいているイメージだったが、全く違っていたこと。

   d)　始まって2～3週間して慣れ始めたころ疲れが出た。それまでは慣れようと頑張ってたが、3月に入って体調を崩すなど、気持ちが落ちた時期があった。とりあえずやらなければ、という気持ちで持ちこたえた。必死だった。

   e)　稼ぐ（お金を貰う）ことは大変なのだと思った。頑張って自分で気持ちを上げて働いていても給料が出ない、それが当たり前のインターン。一方で、突然新人と

して入っても時給が発生するアルバイト。アルバイトはアルバイト止まりだが、インターンを経て企業に入り、お金をもらう、という過程があるのでインターンは必要なものだと思った。国連大学スタッフのように、肩書きがついて給料をもらうのは凄いことだと感激した。

3. 国連大学という看板を背負ってものを書き、それが発行される。けれど立場はインターンであり、失敗は今だったらできる、という心持ちだった。

4. 失敗もできて、そのときはスタッフの方がフォーローしてくれ、訓練して下さっているなと感じた。

5. 役立っている。具体的には、サークル（文芸サークル）活動での冊子作成の場面で。自分たちで作っている冊子はまだまだ甘い、もっと打ち込んで質を上げられる、と確信した。国連大学にしろ、インタビューに行った富士ゼロックスにしろ、企業というものが見られて良かった。インターン後、大学での授業態度が変わった。

6.留学生のインターンと一緒に働くに当たって、最初は彼を留学生として特別視していなかった。しかし、留学生へのインタビューも含め、留学生との本音での付き合いで「異文化との出会い」を感じた。例えば、自分は日本に来ている留学生のことを全く知らなかった。日本語学校に来て大学に入るという過程や、津田塾大学に留学生がいることも知らなかった。さらに、同僚の留学生インターンからは、どうしてそんなに仕事を急ぐのかと尋ねられた。彼自身は、分担したことを約束期日までに終わらせず、その上全く違うことをやっていたりしたので、こちらが苛々することがあった。（勤労）文化の違いを痛切に感じた。また、ニュースレターが100%満足の行く形で完成することは決してないだろうと当初から思ってはいたものの、もう少し満足できるものに仕上げたかった。せめて、最後にゆっくり見直す時間が欲しかった。蛇足ながら、自分の口調は社会人としてはあまり適切ではないのだと思った。

1 インフォーマントの番号は、本文表3の番号に対応している。
2 国連大学の入っているビルのこと。
3 ニュースレターのタイトル

（本学非常勤講師）